

高齢者虐待とジェンダー

NPO法人高齢社会をよくする女性の会

理事長 樋口 恵子

1. 高齢者虐待の実態

- (1) ・ 嫁の立場
- ・ 妻の立場
- ・ 娘の立場
- ・ 息子と夫の立場

(2) 要介護者の性別と虐待

(当会1998年調査から)

〈要介護者への虐待の有無と背景〉

① 要介護者に対して介護者が抱く感情

介護することに生きがいを感じている人は年齢、続柄に関係なく高い回答がみられるが、自分の両親より夫の両親に対しては感じないという回答が多い。

どんな時に介護のやりがいを感じるかについては、「気持ちよさそうにしている」、「お年よりや周囲から感謝された」、「家族が手伝ってくれた時」、そして数は少ないが「財産を譲ると云われた時」、「介護嫁表彰を受けた時」と答えている。

要介護者に対して抱く具体的な感情については、各年齢を通して、「かわいそう」、「情けない」など同情的であり、「自分を頼ってくれ嬉しい」、と好意的回答が多いが、次いで「憎らしいと思った」と答え、僅少ではあるが、「いっそ早く死んだらいい」、「こらしめたい」といった回答も見逃せない。

続柄との関係をみると、自分の母親と配偶者の母親との比較では、姑より実親に対して、より好意的であることがわかる。配偶者については、同情的であり、いきがいを強く抱き負の感情は、他と比較すると低い。

また、介護期間との関係では、期間の長短に関係なく同情的、好意的であり、10年以上になるとさらにその感情を強く抱いている。一方負の感情は、3年から10年と長期にわたると、いっそ早く死んだらいいと思う感情が高まってくる。しかし1年未満の場合、他より低くなっていることは、まだ心身に負担がかかっていないことの現れであろう。

② ストレスが介護者に及ぼす影響

トラブルやイライラについて年齢、続柄、介護期間との関係を探ってみた。共通していることは、「夜何度も起こされること」、「同じことをくり返すいう」、次いで「入浴拒否」、「おもらし」、「部屋を汚す」といった不潔行為がトラブルやイライラの主要因になっている。また痴呆症状の介護は負担がかかっていることはいうまでもないが、介護者にとってストレスは大敵であり、介護を続けるうえでその解消策を講じることが重要になってくる。

特に若い介護者は、「同じことをくり返す」や「不潔行為」に強く反応していることがわかる。また自分の親か配偶者の親の介護かの比較では、主要因は不変だが、「配偶者の親が感謝しない」、「他の家族や近所に悪口をいう」、「食事を食べない」、「お金を盗んだと云った」ことに対してイライラしている。ここにも血縁と他人との差が顕著に現れている。介護期間との関係については、「夜何度も起こされる」ことが、共通してストレス要因になっているが、期間が長期になるにつれさらに大きな要因となっている。このことは、高齢介護者にとって大きな負担となっていることを十分に知ることができる。介護者の年齢、期間には限界があることなどが明らかになった。

③ 虐待行為に関する態度・反応

自分が虐待していると感じたことがあるか否かについては、全く思ったことがないという回答が、年齢、続柄、に関係なく多い。

ただ若い介護者や、配偶者の両親に対しては感じることもあると回答したものが、自分の両親に対してより高くみられた。肉親と他人への感情の違いがここにも出ている。

ストレスの多い介護者は、要介護者に対してどのような態度をとるか、について聞いた結果、「思わず声を荒げたり叱ったりする」、が各年齢を通して最も多く、「無視する」、「叩く」、「外出阻止」、「服薬させておとなしくさせる」、「手を結んだりベッドに縛る」が続く、僅少ではあるが、「おしめ交換の回数を減らす」、「お金を取り上げる」、「食事ぬき」、「足で蹴る」、などの虐待行為に及んでいることがわかった。

85歳以上では、声を荒げるに次いで叩いたりする、が多くなっているのは、高齢者にとっては介護がいかに重圧となっているかがわかる。(1996年の連合の在宅介護調査によると、介護者の3人に1人が要介護者に憎しみを感じ、16%が虐待をしているという結果がでている。)

介護者の虐待行為に対して要介護者はどう反応しているか、続柄との関係については、「黙りこんだ」が多く、「聞こえないふりをする」、「他の親戚や近所に悪口をいう」行為は、自分の親より配偶者の親に多く、「悲鳴を上げたり大声をだす」、「泣き出す」、「暴れる」などは、配偶者や自分の母親に比較的多い。甘えがあるからなのか。

また「わざと嫌がることをしたり」、「機嫌をとる」などさまざまな反応を示すことがわかった。

介護者は虐待をした後どのような気持ちになるか、について年齢、続柄、との関係を見ると、「自己嫌悪に陥り惨めになった」、「後悔してもうやるまいと思った」、「謝りたくなった」と、ほとんどの介護者は悔いている。しかし35歳未満では、ますます「腹がたったり」、「悪いのは年寄りで私ではない」、という気持ちを抱いていることも見逃せない。また自分の母親に対しては、配偶者の母親に対してより、後悔したり謝罪の念が強いことが数値に現れている。

2. 高齢者虐待に関する要望書から

※別紙参照